みめぐみの

第20部

みめぐみの

第20部

大谷光道著

目次

親鸞聖人……2
ご挨拶……2
覚りと方便……5
難行、易行……9
「いづれの行も及び難き身」……11
機……18
パフォーマンス……20
読者の頁……24
あとがき……31

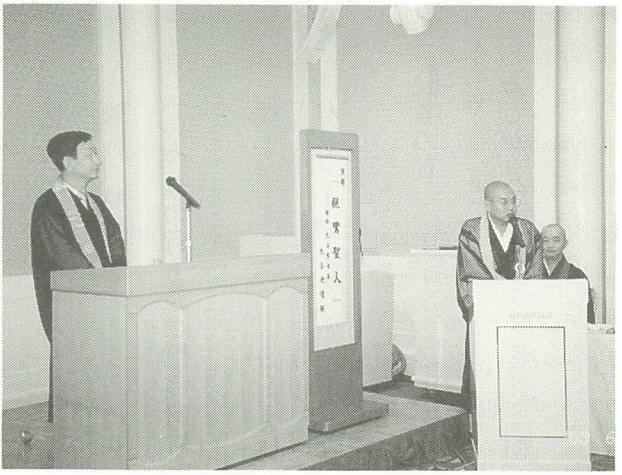
親鸞聖人

ご挨拶

ただ今は、会長の保子（ほし）様より過分のご紹介を賜り、たいへん恐縮です。

前会長の横江様から、是非とも一度話をしに来るようにとお声掛けをいただき、今日のご縁をいただけることになりました。

皆様方の前でお話をするというのはまさに釈迦に説法で、我が身を顧（かえり）みずお招きに応じてしまいました。それで、ご承知の事柄とかなり重複したお話



になるかも知れません。

そしてまた、このように私どもが臨済宗からお呼びがかかるのは、おそらく浄土真宗八百年の歴史の中で、少なくとも江戸時代以降ははじめてのことではないかと、薪流会の方々のお心の広さに敬意を表するところです。室町時代に、臨済宗大徳寺の住職で世に有名な一休禅師（1394-1481）と、二十歳ほど年下の私どものところの第八世で中興の蓮如上人（1415-1499）が親交があった、という説を聞いたことがありますが、真偽のほどはわかりません。面白い取り合わせと言っては何ですが、事実であればたいへん興味のあることです。

薪流会のご活動がたいへん活発なことは、色々とお聞きしています。特に阪神大震災の時などに、現地がいったいどうなっているのかもわからないときに、「まず、行動あるのみ。」と、さっと救援物資をトラックに積んで普段の何倍もの時間をかけて駆けつけ、現地で炊き出しをされたと聞き、菩薩道

は本に書いてあるだけではないんだと痛感しました。

『薪流』という会報を拝見しても、比べること自体失礼なことですが、ご見識の高さとしっかりと足を地に着けて発言されていることに驚きました。我々だとすぐ知識をひけらかしてしまうだけになってしまうので……。

今日は檀家の方々もたくさんお越しくださっているので、できるだけ我々同業者同士の話はですね、差し控えるように心がけます（笑）。私どものところでは「門徒」と言うのですが――信者のことです――そういうところへももちろんお話に行くのですが、それ以外の方々の集まりへも時々お邪魔いたします。そんなときには、いきなり浄土真宗のことをお話ししても仲々うまく話が進みません。それでどうしても三点ほどの前置きが必要になります。今日は禅宗の方々ばかりなのでそんな前置きなど必要ないとは思いますが、皆様方がいつもどんな切り口でお話しされたりお聞きになったりしているのか、仲々私に摑（つか）みにくいところがあるので、いつもの私の話のご紹介旁々、

まずこの前置きを少しお聞きいただきたいと思います。

覚りと方便

「仏教が仏の教えである」ということはあまりにも当たり前で「知らない。」という方はまずありませんが、「覚りを目指して修行するものである」ということについては意外に知られていないことがあります。まず自分が覚るということが念頭にないとすれば、それは仏教ではないと言わざるを

庭　儀

得ません。

これはずっと以前のことになりますが、家の近くの喫茶店で何だったかの原稿を書いていたとき、どこかの教団に通っているという青年が突然私のテーブルに来て、その教団での彼の経験談を話し始めました。はじめは原稿書きも邪魔されてうっとうしいなあと思っていましたが、あまりに興味をそそる話なので、もう原稿もそっちのけにして、一時間以上、そう二時間もだったでしょうか、彼の話に聞き入ってしまいました。

例えば、「お不動さん（不動明王）という仏様は、願い事を叶えていただいたとき、お礼もせずに放っておくと、お不動さん御自らがお礼の請求においでになる。」というのです。「お線香の煙が、その人の後ろから糸を引くように追っかけてくるんですよ。」と話してくれました。

また、その教団で若い女性がお説教に感動して粗相をされたことがあった。そこで、幹部の方々が皆に騒がないように促した上で、粗相のあった畳の上

に半紙くらいの紙を置き、三、四人でそれを取り囲んで何か聞いたことのない呪文（じゅもん）のようなものを称えたら、粗相のあったところが跡形もなく消えてしまった、というんです。

内容はもう忘れてしまいましたが、このほか、色々と普通では考えられない不思議な話をしてくれました。私も面白いもんですから、次から次へ「それで」……「それで」と、聞き手に徹しておりました。

いくつの話を聞いたでしょうか。だいぶん経ってから、「こういうことって信じますか。」って、今度は逆に質問が飛んでまいりました。そこで、半分くらいは出任せだったんですが、「ああ、そういうことってあるでしょ！」と、答えてしまいました。彼は、「信じる」のか「信じない」のか、そのどちらかの答えが返ってくると思っていたんでしょう。全く予想もしない返事が返ってきたので、びっくりして彼は黙ってしまいました。

私はお節介かとも思いましたが、煙に巻くだけであとを答えないと、この

先を「知らないんじゃないか。」と思われては癪(しゃく)だと思い（笑）、続けて「で、あなたの教団では、その先はないの？」と聞きましたら、「ああそうか、この先ね。そういえば、ないんですかねぇ……、おかしいですねぇ……」と彼は考えこんでしまい、今度は私のほうから「方便」ということを話しはじめました。「そういういろんな不思議なことは、お釈迦様が方便として、私たちに仏教を信じるように、私たちを誘い込むためになさっている単なる入口であって、不思議なことを信じるとか信じないとか、そんな目に見える現象のうわべのみにとらわれて、そこまでで終わってしまっていたのではお釈迦様のお心に添わないことになりますよ。その先が大事なはずですがね……。」とまで話し、仏教は覚りが目標であることまでは話しませんでした。彼の教団で教わるだろうし、また話す機会もあるだろうと思ったからです。

この青年は、よく理解してくれた様子には見えました。その後一度顔を見ましたが、話す機会はついにないままになってしまい、残念です。

いずれにしても、「覚りを求める」のが他の宗教にはない仏教の大きな特徴です。

難行、易行

お手許の資料で『十住毘婆沙論易行品』とあるところをご覧ください。

稚児行列

これは私どもの門徒の皆さんに読んでもらっている『みめぐみの』という薄い冊子の第三部から抜粋したものです。

龍樹菩薩は南インドに出られた高僧で初期の大乗仏教を確立した方なので、我が国では各宗とも仏法を伝えてくださった方として第一祖に仰いでいます。それで「八宗の祖」と言われているお方です。

龍樹菩薩がお書きになった『十住毘婆娑論』の中の『易行品』というところに、このくだりが出てきます。これはその『易行品』を口語訳した『聖典意訳』（西本願寺）の中から抜粋してさらにもうちょっと私が筆を加えました。

菩薩が修行をしていく中で、修行があるところに達して後へ戻らない――もう後戻りすることがない――そういう位を「不退の位」と言います。覚りを開いたというわけではないのですが、後戻りしない位は大切でしかも魅力的です。

そこに至るのに難行――大変難しい修行、厳しい修行、苦しい修行――

をするのと、易行（いぎょう）――易しい、楽な修行――でそこへ行くのと両方がある。易しいほうの修行でその位に至ろうとする者は能力の劣った弱い者である、まあ意気地（いくじ）なしというか弱い者である。強く雄々しく進もうとする者は難しいほうの修行をするべきである。こういう二つの道があることを、龍樹菩薩はお説きになりました。

少しお聞きしたところ、臨済宗の場合だと一日三時間ぐらいの睡眠で三年間修行しないと一人前になれないと伺っております。私なんかどうかなあって考えてみると、二晩くらいならできるかな、と思います。とても三年はおろか一年いや一月にも及ばない、という情ない有様です。

「いづれの行も及び難き身」

ここではじめて今日の本題の親鸞聖人にご登場いただく段取りになりました。親鸞聖人はご自身のことを「いずれの行も及び難（がた）き身」であると仰いま

した。

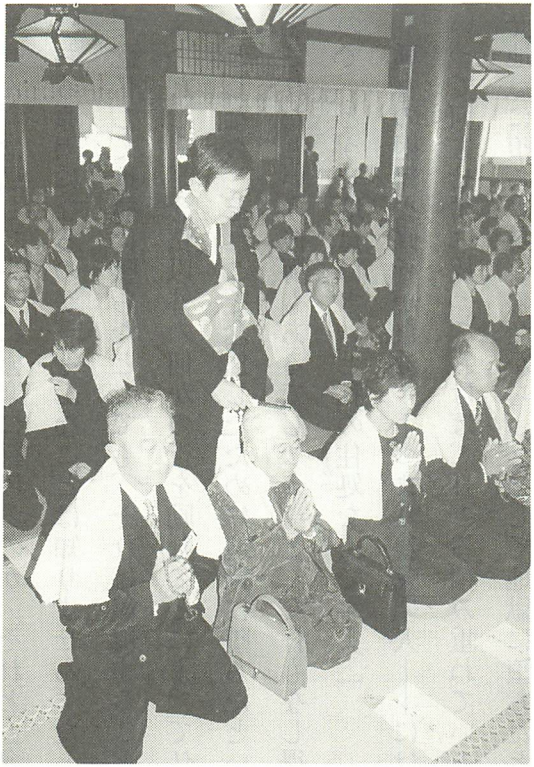
これは『歎異鈔』の第二節に記されている聖人のお言葉で、『歎異鈔』は親鸞聖人のお弟子の唯円という人が、在りし日の聖人の言行を綴ったもの（ただし、筆者は唯円以外であるとする説もある）としてたいへん有名です。因みに、最近ではどうか知りませんが、私などは『歎異鈔』は高校の国語に出てきました。仏教系の高校でなく公立の高校で、しかも国語甲（選択でなく必修）で習いました。それほどに我が国の著名な文学作品とも考えられているのでしょう。

さて、この第二節（末尾参照）は全体を三つに分けることができます。最初は、関東から極楽往生の道を聞きに来たお弟子さんたちにご挨拶をされて、「よく命の危険を冒してまで遠いところを尋ねてきてくださった。ところで、私が念仏以外に極楽往生の道を知っているとか、どこかにそのことが書いてあるとか、私の奥に何かがあるようだと思われているとしたら、それは大き

な間違いです。何なら奈良や比叡山に立派な先生方がおられるので、そちらでお尋ねください。」と、突っぱねられる部分です。

次の段落は、「いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定（いちじょう）すみかぞかし」までです。

「私は、ただ念仏して、間違いなく阿弥陀様にたすけていただけるという、師匠である法然上人の仰せを信ずるよりほかに別の理由はあり



帰敬式（おかみそり）

ません。念仏して本当に極楽に行けるのか、それとも念仏することは地獄に堕ちる原因になるのか、そんなことは知りません。たとえ法然上人に騙されて念仏して地獄に堕ちたとしても、それは後悔することではありません。ひょっとして、念仏以外の何かの行を励むことによって仏になるはずの身だったとしたら、それこそ念仏したために地獄に堕ちたということになるので、騙されたという後悔もあるでしょう。どんな行もなし得ない身（私）であるので、どうせ地獄はきっと私の住処なんですよ。」

種々の困難な修行が自分――つまり親鸞聖人――にはできない。だからといって何もせずに放っておけば、日ごろ積み重ねている悪業に引かれてどうせ地獄に堕ちる身なのだから、念仏して地獄に堕ちたとしてもそれは驚くに足りることではない。むしろ念仏してひょっとして往生できたらそれは儲けもの、言ってみればだめもと――だめでもともと――で念仏をするのであると。だめもとの覚悟であるということをここで告白されているのです。

師匠である法然上人の仰ることを聞いて、念仏してお浄土、極楽へ行こうということ以外、自分にはすることはないのだということをここで仰ったわけですが、そういう凡夫のですね、聖者じゃなくて凡夫——当たり前の人間——が助かるには念仏してお浄土に行くしかないのだということを、ご自身が凡夫に徹した姿を現すことによって教えてくださった、ということができます。

最後の段落は「阿弥陀様の本願が本物であれば、お釈迦様は嘘を仰らない。お釈迦様が本当のことを仰るのであれば、善導大師は嘘を仰らない。善導大師のご説明が本当であれば、法然上人は嘘を仰らない。法然上人の仰せが本当ならば、親鸞（私）が言うことも空っぽではないはずだ。私の信心は、このようなものだ。皆さんもここまで聞いた上は、念仏を取って信じようとも、捨てようとも、それぞれ自分で決めるがいい。」と、畳み込まれる痛快な部分です。

ひとたびだめもとの覚悟は表明したけれども、これだけのしっかりした根拠があって、念仏には間違いなく極楽に往生できるという働きがあるのだということと、お釈迦様から真実の法がこの親鸞に伝わっているのだという自信・確信とを述べて締めくくられたのです。

『歎異抄』＝第二節＝

一　おのおの十余箇国のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こころざし、ひとへに往生極楽のみちを問ひきかんがためなり。しかるに念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こころにくくおぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にもゆゆしき学生たちおほく座せられて候ふなれば、かのひとにもあひたてまつりて、往生の要よくよくきかるべきなり。

親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひと（法然上人）の仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土に生るるたねにてやはんべるらん、また地獄につべき業（ごう）にてやはんべるらん。総じてもつて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ。そのゆゑは、自余の行もはげみて仏に成るべかりける身が、念仏を申して地獄にもおちて候はばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔も候はめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申すむね、またもつてむなしかるべからず候ふか。詮ずると

ころ、愚身の信心におきてはかくのごとし。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面面の御はからひなりと云云。

機

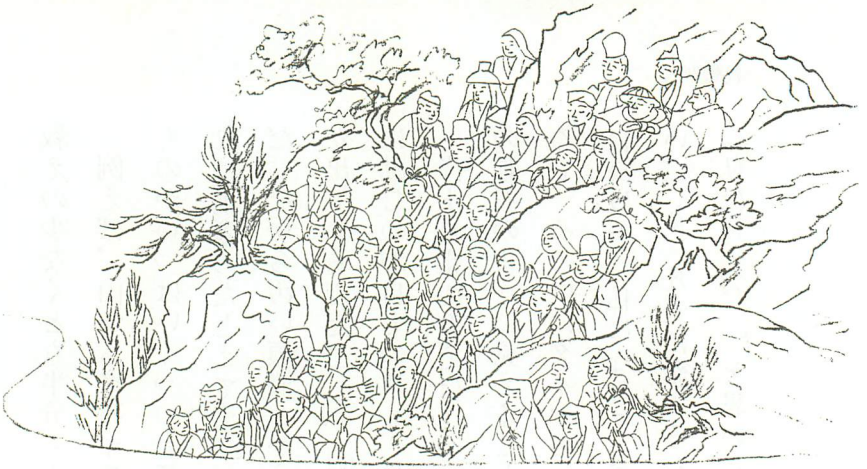
このように念仏で助かるのは、今の『歎異鈔』にもあるように、「いづれの行も及び難く、地獄に堕ちるしかない私を見出した者」であるということです。

浄土真宗では「機（き）」ということを重視します。機とは宗教的器、宗教的能力のことで、能力が高ければ――これを「勝機（しょうき）」という、聖者の器――難行に耐え、修行の成果がその身に現れるのですが、能力が低ければ――これを「劣機（れっき）」という、凡夫の器――修行に耐えられません。前者は自分の力（自力）で成仏（覚りを開く）できますが、後者にはそれができません。浄土真宗は後者のための教えなのです。ですから、「私の正体を見極める」ことが、

教えの少なくとも半分くらいは占めると言えます。

例えば、山からダイヤモンドの鉱石を採ってくると、外には汚い、不要なものがいっぱいくっついています。しかし中には必ずダイヤがあります。これは前者のたとえです。「私は成仏できるんだ。成仏できる種を持ってるんだ。だから汚い煩悩とかそういうものを削って取ってしまえば、きれいな私が出てくるんだ。」と、自分の中にある成仏の種（仏性）を当てにして修行に励むのが自力の教え、先に話した難行道を歩むことのできる人です。

浄土真宗の教えはこの反対で、「私の中に成仏の種などない。たとえ何かの鉱石のように見えることがあったとしても、よく見るとそれはただの石ころで、その中にダイヤモンドなどの宝石が入っているわけはないんだ。自分自身は全く仏になれるような、そんな素晴らしい種は持ち合わせてはいない。」と、凡夫に徹するということです。凡夫に徹するといっても、無理に「私は凡夫だ。」と思い込めるものでもありません。凡夫になるんではなく



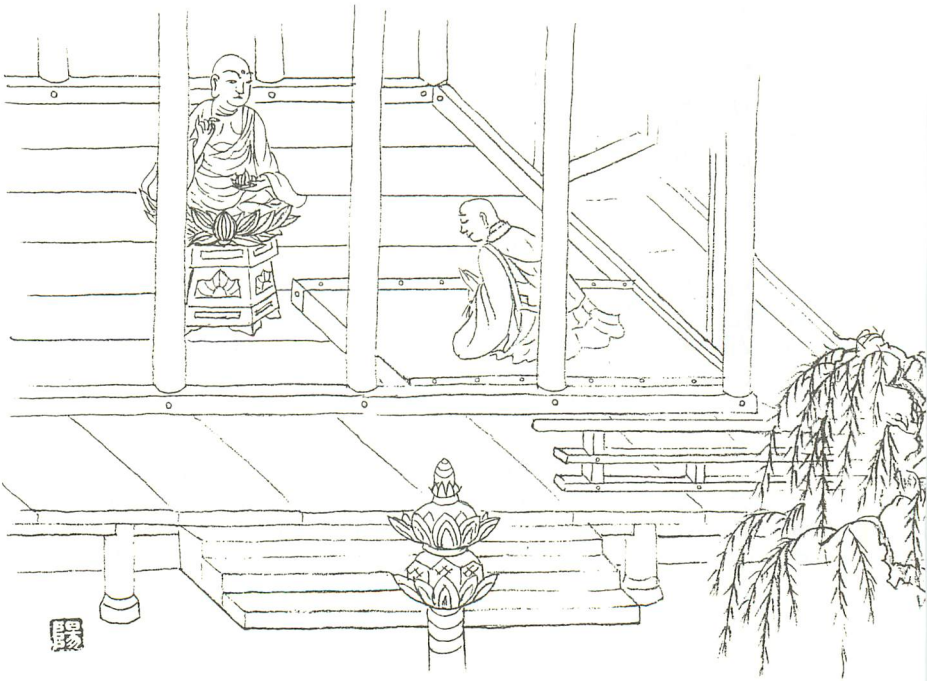
て凡夫である自分を見つけるということです。よく「バカになる。」といいますが、バカになるんじゃなくてバカである自分を見つけるということが、念仏の教えへの入口になります。そして、仏になる種は全部阿弥陀様、仏様から頂戴する、それ以外に仏になる道はない、と心が定まって、気が付いたらお念仏を称えている、これが浄土真宗です。

パフォーマンス

親鸞聖人は、自分自身がいづれの行も及び難き身だから易行の念仏を選んだと仰るんだけれども、「果たしてそうなんだろうか。」とここでもう一

度考えてみる必要があると思います。

これはどうも、私ども後々の者のために、まあ芝居というか、最近よく使う言葉で言うとパフォーマンス。さらに言いかえれば「いづれの行も及び難き」振りをしておられるだけであって、ご自身は比叡山で二十年間修行されていて、そのまま進まれたらきっと覚りを開かれていただろうと思えてきます。むしろお弟子であるとか、後々の私たち



のために、わざわざこういう芝居をなさったんだと、私はいただいております。「私はよくても、後の者たちにできるかな。やはりお前たちにはできないな。」と、無意識にでも親鸞聖人のお心を動かすものがあったのではないかと。他の者のためにご自身の将来を捨てて——切り換えて——難行といわれる行をしなくても、初めから念仏の易行道で救われる、そういう道を開いて、と言おうか、作ってくださったんだというふうに考えられてしょうがないのです。

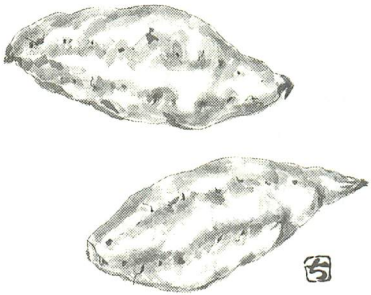
親鸞聖人は比叡山を下り法然門下に入られて二年後、夢の中で救世菩薩（観音様）のお告げを受けられます。そのお告げで観音様は「……私が一生の間そなたを護り、命終わるときそなたを導いて極楽に生まれさせるであろう。」と約束してくださるのです。その夢の中で、聖人が東のほうを見られると、険しくそびえ立つ山々に数千、数万、数億とも知れぬ数の人々が群がり集まっていて、今のお告げの通りを皆に説き聞かせ終わって、夢から覚め

られた、と伝えられます。（『御伝鈔』上巻第三段）。

これは聖人が念仏の易行を選ばれたことに間違いがないとの証明だと言えると思います。

――つづく――

次の二十一部では、浄土真宗の在家性、臨済宗の宗祖・栄西禅師と親鸞聖人、などを予定しています（筆者）。



読者の頁

感想意見

東京都町田市　諸戸　貞昭さん

『みめぐみの』第十九部九頁に〝科学というのは客観的な世界を扱うもので、宗教というのは主観的な世界を扱うものである。…「仏の力は私に働く」〟と述べられ、信心により心豊かな生活になっていくことが自得されます。感謝いたしております。

新潟県糸魚川市　吉岡　こよえさん

私は生母を六十歳で見送りました。大変信仰の厚い、私共子供達に銘々お経の本を又、カセットを（法話の）配り、三十代から阿弥陀如来様の教えを耳にして

きました。亡き後、自然にお寺へお参りするようになり、その都度小冊子を読んで居ります。いつかお念仏の心に溶け込んで行くよう…と姉妹でお寺参りをしています。これからもずっとずっと本を読みたいと思っています。　合掌

質疑応答

富山県高岡市　中臣　みきさん

光道台下はいろいろなところへお出かけとのことですが、あくまでも台下ですから、人師の立場での招聘（しょうへい）に応じていられるということなのでしょうか。たとえば、覚られた人のようなところへ、みずから聴聞に出かけられるというような形で出かけられることはあるのでしょうか。どんな立場であり東本願寺二十五世の事実はゆるぎないのですが。

光道台下のご法話には、いつも言葉では言い表せない慈悲の心があふれでてい

て、とても感動いたします。これは長らくご両親であられる前門様御夫妻に呢懇してこられたことにより自然に台下の身に薫習（くんじゅう）してきたものなのでしょうね。この度は宗教と科学の同質性、異質性についてわかりやすく説き明かしていただきありがとうございました。

答　きわめて大切な質問をしてくださいました。

覚られた人？やそうでない方、どなたのお話でもお聞きしなければならないと思っています。私自身の怠け心のため、十分に実行できているとは決して言えませんが……。

また、いつも私は「お念仏のコマーシャル」と口癖のように言っておりますが、私を「人師」と思ってくださる方々ばかりにお話をしているのであれば、それはコマーシャルをしていることにはならず、お念仏の輪は広がりませんし、私は十分に働いていないことになってしまいます。偉そうなことを

並べましたが、私のつもりだけでもお酌み取りください。

滋賀県草津市　高谷　定道さん

『科学と宗教』誠に興味深く、客観的理性的である科学は方便であって決するのは人間すなわち心である事、目が覚めました。科学は創造主の一部の仕事をする時代となり客観的事実を作りあげる。すなわち神に近づき、それを決めるのは私の心である。すなわち神であるということか？バカな質問です。

『経済（会社経営）と宗教』でお話を伺いたいと思います。

答　決して「バカな質問」ではありません。「科学が創造主の一部の仕事をする」→「すなわち神である」との論理の展開はまさにご指摘の通りだと思います。この論理があるからこそ、宗教と科学の違いがわからなくなるのだと思います。強大な権力者を、嫌でも神同様に扱わねばならないことが起こ

るのも、これと同じことではないでしょうか。宗教は、現実世界（客観世界）を支配するものではなく、心の安住を与えるものであることを銘記すべきでしょう。

「経済と宗教」は、私の挑戦すべき課題だと思いました。もう少し充電して、発表したいと思います。

富山県福野町　河合　寛さん

科学と宗教を読みロボットについてのことは興味深く感じました。質問がありますのでお願いします。私は科学は分別であり、宗教は無分別を教えるものであると聞いたことがあります。

宗教（仏さま）の中に科学も含まれているのでしょうか。すべては仏様のお働きによると思いますが？

それと現世利益和讃をあらためて拝読させていただきました。南無阿弥陀佛

答 科学そのものが意志を持つわけではないので、科学即分別というのは少し短絡的ではないでしょうか。分別は凡夫の思考、無分別は仏の智慧と言えるでしょう。

私は、宗教と科学と、どちらかがもう一方に含まれるものとは思いません。別の言い方をすると、両者に上下関係や優劣があるとは言えないと思います。

こんな言い方をすると理科嫌いの人には嫌われるかも知れませんが、「宗教と科学は夫々、人間を原点にして直行（または独立）している。」と、私は思っています。

つまり、「宗教がX軸上にあるとすると、科学がY軸上にあり、私はその交点（原点）に居る。」と考えればよく、XとYはお互いに他の影響を受けず、ただ、その交点にいる私はもろに両方からの影響を受けるという関係だと思います。これは第十九部の内容の別な言い方です。そう、第十九部でこのことを言っておけば良かったのですが、今思いつきました。

仏様は私の心を養い育てて下さり、心にだけ働きかけられると言えるでしょう。科学は私たちの日常生活を豊かにしてくれますが、心を育てたり心の安住を与えてはくれません。河合さんは「すべては仏様のお働きによる」と仰いますが、「すべて」の中身によっては私には異論があります。老婆心ながら少し申し上げます。仏様はキリスト教の神のような全知全能の神とは違うので、私たちの運命を支配なさることはありません。仏教は因縁によって事物が生滅することを説く教えで、仏力で私たちの運命を変更することはできないのです。私に、やるべきことに立ち向かうことのできる勇気を与えてくださいますが、幸運を開く物理的な力は貸してくださいません。例えば、モーゼの十戒の映画にあるような、海が二つに割れて海の底を歩いて渡れるような、そんなことはしてくださいません。つまりそういうのがいわゆる現世利益であって、奇跡を信じたり頼んだりするのは、お念仏の教えではないと言えます。

あとがき

みめぐみの刊行委員会

今号で『みめぐみの』は第二十部を迎えました。ご執筆下さる光道台下に感謝申し上げると共に、熱心な読者の皆様に深く御礼申し上げます。

さて、去る六月十一日に臨済宗の僧侶の方々の団体である「薪流会」で、「親鸞聖人」と題して講演をされました。今回はその前半部分をまとめて下さいました。

これまで、色々な所に講師として足を運んでおられます。今回初めて他宗派（聖道門）に赴かれ講師を務められました。これは、浄土真宗八百年の歴史の中でも極めてまれなことだと存じます。『みめぐみの』御親教集も二十部を数え、他宗との交流にまでその広がりを見せ始めたことは光道台下が積み上げて下さった努力の賜と刊行委員会一同喜んでおります。

次号ではその講演の後半部分をまとめて頂く予定となっております。禅宗と真宗の修行の違いや正像末の思想、そして、現世利益、先祖供養を証すことによって、真宗門徒の進むべき道を分かりやすくお話し下さいます。どうぞご期待下さい。

みめぐみの　第20部

2003年11月５日　印刷
2003年11月10日　発行

定価 200円

著　者　大谷光道

発　行　みめぐみの刊行委員会
〒600-8167 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754
本願寺寺務所内
TEL.075(351)3555　FAX.075(351)3120
振替口座　01060-5-56990

印　刷　㈱中外日報社

みめぐみの刊行委員会刊